

城下町を起源とする都市、盛岡の景観パターンの解析

岩手大学 学生員 ○千葉 行雄
岩手大学 正会員 安藤 昭

1. 序

日本の都市は歴史的にみて画期的なるつの時期をもった。すなわち、古代律令国家成立期、近世幕藩体制成立期、そして近代立憲国家成立期の都市がそれである。なかでも中国文化の影響のもとに成立した古代都市および近代西欧文化の影響のもとに成立した近代都市にくらべ、これらの間に位置する自生的土着的都市としての近世の都市城下町は日本的都市造形の典型として特筆され、しかもその一部は現代地方中核都市の原核として現存し都市に個性と奥行きを与えている。しかし、近年におけるわが国の急激な経済社会の進展につれて、地方都市においても新しい都市景観の変容がもたらされ、都市景観の視覚的混乱と個性の喪失が生み出されてきている。本研究は、このような問題に接近すべく、城下町起源の都市、盛岡を取り上げ、まずマクロな視点から盛岡市の景観パターンの抽出と抽出された景観の評価を試みたものである。

2. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、城下町起源の都市、盛岡の日頃接している都市景観について、カラー写真を景観モデルとした景観パターンの解析とその評価の解析を行なうことにより、都市景観のパターンの抽出とそれら相互の景観の好みの関係を明らかにすることである。

(1)、調査対象、調査地域および回答者

調査対象は当市を構成している都市景観要素のすべてとし、調査地域は主として当市の市街化区域とした（この景観だけ市周辺のものを含む）。被験者は市街化区域に居住する成人男女109名である。被験者の個人属性を表-1に示す。

(2)、調査の方法

本実験に用いた試料は当市内の任意の景色をカラーフィルム（フジカラーF/35/24×36mm）を用いて撮影し、キャビネサイズに焼きつけたカラー写真である。用いたカメラはニコンで、使用したレンズは標準レンズである。撮影した写真は350枚程度であるが都市周辺の河川景観のように似ているものは代表的なものにしばり、都市中心部に集中している個性的な景観を中心に80枚を選定し、本実験の景観モデルとした。資料の集收期間は昭和55年10月1日～12月20日である。

調査方法は調査員が被験者の家を直接訪問し、

性別	男	55
	女	54
在住年数	20年以下	52
	20年以上	57
年齢	20-30	55
	30以上	54
計		109

表-1 被験者の個人属性

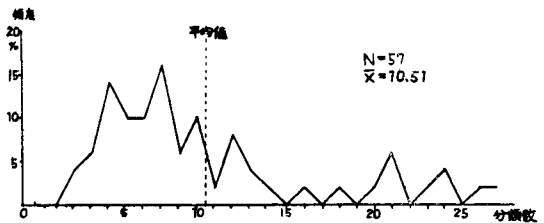


図-1 盛岡在住20年以下の被験者による分類数の出現頻度

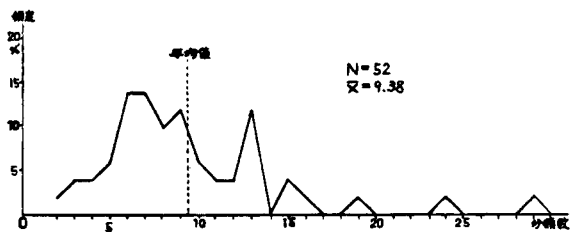


図-2 盛岡在住20年以上の被験者による分類数の出現頻度

被験者本人に会い調査をする面接調査法で行なった。
調査期間は昭和55年1月15日～31日である。この調査は、各家庭の中で前述の80枚の写真を被験者に見てもらい似ているものとおしを集めて群を作らせ、次いで各写真について好きから嫌いまでの5段階の評価をさせたものである。

なお本研究では在住年数20年以上のものとそれ以下のものでは景観のイメージ内容が異なることを考えて被験者を在住年数20年未満のグループと20年以上のグループの2つに分けて集計し比較検討を加えている。都市化の進展につれて人間の行動領域もいっそう拡大し、居住年数も短くなる傾向が見られる中で、これら2つのグループの景観認知の相違を明らかにすることは意義のあることであると思われる。

3. 都市景観パターンの分析結果

図-1と図-2に在住年数別の写真の分類数とその出現頻度(%)を示す。それぞれの図に示されるように在住年数20年未満の被験者の平均分類数は $\bar{x}=10.51$ 、在住年数20年以上の被験者の平均分類数は $\bar{x}=9.38$ となっており、20年未満の被験者では分類数に安定的で顕著なピークはみられず、20分類以上の細かい分類をしている。これに対し20年以上の被験者では6～7分類にかなりのピークがみられ、細かな分類をした被験者は比較的少ない。

つぎに、これらのデータのパターン化の手法は、ある被験者が写真番号で①, ②, ③(ただし $1 \leq i \leq 80$)を同一の分類としたとすると、80枚の写真間の関連性を表すマトリックスにその分類の最少番号の列と他の写真番号の行との交点に1を加える。つまり①の列の④行と③行とにそれぞれ1を加えるということである。そして、これらのデータを在住年数20年未満の被験者57名、在住年数20年以上の被験者52名について、それぞれ加えあわせ写真間の在住年数別類似マトリックスとした。つぎに各マトリックスごとに以下のような作業を行なった。まず、マトリックスの最大値を探し、それを Q_{im} と表わし、この i 行と m 列をひとつの群Aとして取り出す。 i 行に、 Q_{il} と Q_{im} 、 Q_{2l} と Q_{2m} 、 $\dots$ 、 Q_{80l} と Q_{80m} の平均を記入し、 m 列を消去する。そして新しくできた79行79列のマトリックスについて再び最大値を探し、同様の作業を繰り返して写真のパターン化を行なったものである。

この結果を在住年数別に表-2および表-3に示す。表に示されるように在住年数20年未満においては、11の景観パターン(4/57カットポイント=この作業を止めた時の基準値)、在住年数20年以上においては、9の景観パターン(3/52カットポイント)が抽出された。なお、表-3で示された写真番号の上に°印を付けたものは表-2の景観パターンは分類上一致したが、たものを示す。本解の考察と要約および評価に関する研究成果については講演時に報告する。

参考文献 1) 安藤昭、五十嵐日出夫：城郭のイメージ構造に関する研究、土木学会論文報告集 第211号 1979年

景観パターン	写真番号	1	3	4	5	6	10	13	14	15	16
A	18	23	35	36	38	47	56	62	74	76	
B	2	21	28	30	52	53	54	55	57	58	
C	7	12	24	61	63						
D	8	21	22	23	29	37	39	41			
E	9	11	25	34	50	71	73	75	78	79	
F	17	49									
G	19	33	66	67							
H	20	32	46	64	69	70	72	80			
I	31	48	68								
J	42	43	45	49							
K	51	65									

表-2 在住年数20年未満による分類

景観パターン	写真番号	1	3	4	10	14	15	16	26	35	36
A	39°	56	61°	62	76						
B	2	7°	12°	27	28	30	52	53	54	55	
A'	57	58	59	60	63°						
D	5	13	18	38	74						
E	8°	8	17°	21	22	23	24°	29	37	40	
F	41	47°	51°								
G	9	11	25	34	48°	50	71	73	75	77°	
H	18	79									
I	19	66	51								
J	20	32	46	64	65°	69	70	72	80		
K	31	08									
L	33	42	43	44	45	49					

表-3 在住年数20年以上による分類